

【実践報告】

**InterProfessional（多職種連携・異業種交流）からプロフェッショナリズムを
考える**

・ 木に関わる専門職の協業を手がかりに ・

種村 文孝

**Thinking about the Professionalism from InterProfessional:
To Clue the Collaboration of Professionals involved in the wood**

TANEMURA, Fumitaka

1. 概要

2015 年 10 月 18 日（日）に、関西 IPE 研究会と教育実践コラボレーション・センターの
主催によって、「公開ワークショップ 2015 in 京都大学 InterProfessional（多職種連携・
異業種交流）からプロフェッショナリズムを考える - 木に関わる専門職の協業を手がかり
に -」を開催された。

本ワークショップは、様々な専門職や職業人を対象に、専門職教育や他職種連携に対す
る考えを深めることを目的に企画されたものである。InterProfessional Education に関
しては、医学教育を中心に扱われているが、今回は木に関わる専門職の協業に注目して参
加者に専門職教育や多職種連携について話し合ってもらったことを考えた。話題提供者を、
林業従事者、建築家、大工の 3 名にお願いした。その上で、医師や弁護士など伝統的な専
門職が、仕事において普段接することが少ないと思われる領域の協業から、他の専門職に
もあてはまる点と異なる点などを検討した。会場は、京都大学紫蘭会館別館研修室 2 を利
用し、当日は、助産師、薬剤師、弁護士、行政書士、消防士、編集者、など 18 名の多様な
専門職の方が参加された。また、コメンテーターとして、シブスヘルスファーマシー東
日本教育研修部部長／主任研究員の川村和美氏とヴァンジ彫刻庭園美術館学芸員の渡川智
子氏にもお越し頂いた。

当日スケジュール

時間	内容	詳細
10:00～ 10:30	受付	参加者は以下のことを行なう ・ 名札へ名前、職業、ひとことを記入する ・ 動物の絵を一枚選び、名札に貼る ・ くじを引く

10:30～ 12:45	開会あいさつ・趣旨説明・話題提供者のご紹介 参加者の自己紹介 話題提供	参加者の自己紹介では、名前、所属、選んだ動物とそれを選んだ理由についてを発言する 話題提供者は以下の通り ・京北銘木生産協同組合 一瀬章弘氏 ・(株) R-village 藤井俊二氏 ・(株) アラキ工務店 荒木勇氏 各 20 ～30 分程度 3 名からの話題提供後、参加者は 3 種類の付箋を配布し、「自分の業界でもあるあるという点」「自分の業界とは違うなという点」「その他・疑問点」を書く
12:45～ 14:00	昼食	
14:00～ 14:30	コメンテーターからのコメント	コメンテーターは以下の通り ・シップスヘルスファーマシー東日本教育研修部 部長 ／主任研究員 川村和美氏 ・ヴァンジ彫刻庭園美術館学芸員 渡川智子氏
14:30～ 15:35	グループワーク	自己紹介後、「自分の業界でもあるあるという点」「自分の業界にはないなという点」を KJ 法で整理する。
15:35～ 15:50	休憩	
15:50～ 17:00	全体共有・全体総括	自分のグループの内容を全体に向けて共有する。 コメンテーター、話題提供者の感想・コメント 主催者からの全体総括

＜午前の部＞

10 時から 10 時 30 分までの 30 分を受付時間とした。参加者の方々には、受付でくじを引いて頂き午後に実施するグループワークの班を決めた。また、受付に用意された好きな動物の絵を 1 枚選んで名札に貼って頂くようにした。ささいな遊び心であるが、様々な専門職の方が集まる場において、堅苦しくなりすぎないように、アイスブレイクの効果も持たせてのことである。

10 時 30 分から、12 時 45 分までが午前のプログラムにあたる。はじめに、京都大学大学院教育学研究科の渡邊洋子准教授より、開会あいさつ、趣旨説明、話題提供者の紹介がさ

れた。特に留意したい点は、木に関わる専門職の協業でありながら、参加者の方々には木に関する話よりも多職種連携やプロフェッショナリズムに焦点をあてて頂く必要があるため、「プロであるということはどういうことか」、「プロとして働くとはどういうことか」について、考えていただきたい旨の説明があったことである。その後、参加者の方々から 1 人 1～2 分程度で自己紹介をしていただき、多様な専門職の方が参加していることを共有し、アイスブレイクをした上で、木に関する専門職の方々から話題提供がなされた。

まずは、京北銘木生産協働組合の一瀬章弘氏より、林業従事者と銘木生産協同組合の仕事の内容紹介とニーズに合わせた木材の調達という協業の説明がなされた。林業は、時代の変化によって木材需要が減少し、林業従事者の後継者不足などが育成上の課題として挙げられる。化粧材としてブランド化された北山杉であっても、価格競争や需要の減少によって、時代と社会に合わせた変化が求められている。また、曲がった木材などを設計士や施工者から求められることがあり、ニーズに合わせた木材の調達が協業の形として提示された。材木を使用する人を想定して対応すること、ニーズに合わせた対応が挙げられる。

続いて、株式会社 R-village の藤井俊二氏より、建築家の仕事紹介及び建築家の協働の事例が紹介された。その中では、建築家が施工者と発注者と対等な関係となるのが理想であるが、実態としては権力勾配があり難しい実態が投げかけられた。建築家は発注者の代理人でもあり、施工者からは「先生」と呼ばれる存在である。若手の建築家の中には、施工者から「先生」と呼ばれて、自分が偉いと勘違いする者もみられるという。藤井氏は、建築家が施工者と協業する上での工夫として、現場にはスーツで行かないということを心がけているとのことであった。スーツでは現場での作業に支障をきたすため、作業が出来る服装で行くことによっても施工者との距離を変えることができる等の心がけや工夫を紹介いただいた。

最後に、株式会社アラキ工務店の荒木勇氏より、大工の仕事の実態と、時代と社会の変化にともなう現状が紹介された。京町家の改修などでは、様々な職人との協業が行なわれている。建具職人、左官屋などである。しかし、近年においては、木造建築の減少などにもより、そのような職人の減少や、若手の中には技術不足が見られるという指摘もあった。そして、建築家との協業においては意見をしにくい場面があるという壁なども指摘された。

3 名の話題提供の後には、参加者に 3 種類の付箋を配布し、「自分の業界でもあるあるという点」、「自分の業界とは違うなという点」、「その他・疑問点」を書いていただき、話題提供の内容を振り返った後で午後のグループワークにつなげられるようにした。

＜午後の部＞

午前の部の終了後は、話題提供者、参加者、主催者が一緒にレストランに移動してランチをとって交流を深めた後で、午後の部が開始された。

まずは、14 時から 14 時 30 分にかけて、シップスヘルスファーマシー東日本教育研修部部長／主任研究員の川村和美氏とヴァンジ彫刻庭園美術館学芸員の渡川智子氏からのコメントをいただいた上で、14 時 30 分から 16 時 45 分にかけてグループワークと全体共有を行なった。4 つのグループに分かれて、「自分の業界でもあるあるという点」、「自分の業界とは違うなという点」、「その他・疑問点」について自由に議論をしていただき、KJ 法を用いて模造紙にまとめて発表していただいた。

1 グループでは、人を育てることについて、仕事のマネジメント、ニーズの把握、働く上での大事なことが主な論点として挙げられた。人の育成やマネジメントに関して各業界で課題となっていることが共有された。人材育成には時間がかかること、仕事のマネジメントにおいては期限や効率を重視しなければならないことなどがあり、どの業界においても共通する課題である。ニーズの把握に関しては、クライアントや他の専門職のニーズの把握を適切に行なうことの困難さが議論された。自分が行なえること、行ないたいことと、クライアントのニーズが異なることがあり、専門職としてニーズに対応していくのか、決められたこと以外はしないのかによってもプロ意識が分かれる点などが指摘されている。

2 グループでは、専門職の権限の壁、マネジメント、目に見えない専門性の評価、ユーザー教育などが論点として挙げられた。専門職には権限の壁があり、自身の専門領域の理解とユーザーのニーズの理解を踏まえて対応していくことが求められる。権限の壁は、自分の専門性の領分でもあり、技術的裏付けがある部分が権限なのではないかとの指摘がなされた。しかし、専門性に関しては他の専門職からは目に見えにくい部分も存在する。建築家の専門性に関しては、感覚的な部分もあり、そのような評価は難しく理解されにくいという課題もある。また、市場からのニーズの減少に関しては、ユーザー教育を専門職が行なっていく必要があるのではないかということも議論された。

3 グループでは、「先生」と呼ばれる専門職、専門職のこだわりと経済性が中心的に議論された。「先生」と呼ばれる専門職とそうではない専門職の差は何か。また、専門職のこだわりは、経営の観点と衝突することがあるといった点である。経済合理性や効率性を考えると、手間隙かけて行なうことや、人材育成などの時間がかかることは敬遠されがちである。しかし、専門職にとってはこだわりこそが専門性につながる部分でもあり、効率などといかに折り合いをつけていくかが重要なのではないかということが議論された。

4 グループでは、「先生」と呼ばれることの是非、権力勾配と他職種連携について主に議論がなされた。専門的な知識や技術を有する専門職が「先生」と呼ばれることは、必要なことでもある。例えば、医者が患者に説明をする際など、伝えたことを遵守して頂かないと命に関わる場合などがあり、「先生」という権威や説得力が求められる。一方で、協業の場面においては、対等な関係で「先生」と呼ばれない存在の方が連携しやすいのではないかという指摘もなされた。

グループで議論をした後、各グループにまとめたことを発表し、質疑応答を行なって本ワークショップを終了した。各グループの論点の相違点などからも参加した専門職の方々に気づきがあり、全体での質疑応答や意見交換も盛り上がり、時間がまだ足りない印象を残しながらワークショップは終了した。

2. ワークショップ開催を振り返って

本ワークショップを開催して、多職種連携においてどのような意味をもつものなのかを振り返ってみたい。その際に、自分と異なる専門職の取り組みから考えること、多様な専門職と語り合うことに注目したい。今回の企画では、木に関する専門職の協業をサブテーマに掲げ、林業従事者、建築家、大工の3名の話題提供をもとに、多様な専門職が話し合う形式を採用した。参加した専門職の中には、木に関する専門職はおらず、参加者は自分

の専門領域外の話を開き、それを元にプロとして働くこと、プロとともに働くことを考えるということが大きな特徴であったといえる。

自分の専門領域外の話聞くことは、自身の専門領域にすぐに役立つものではないと思われ、敬遠されがちかもしれない。木に関する専門職の協業から、自分自身の専門領域についてどんなことが得られるかというのは、参加する前の時点では参加者には想像できなかったのではないかと推測される。ワークショップを企画する際には、違う領域から自分たちの専門領域と共通する点、異なる点を見つけ出し、プロフェッショナリズムについて考える機会とできるのではないかと考えていたが、まさにそのような場になったといえる。ニーズへの対応、他職種連携における権力勾配、「先生」と呼ばれること、マネジメントの困難さ、ユーザー教育など、木に関する専門職の事例を元にして、自分たちの専門領域にも共通する課題などが多く出された。これは、自分たちと異なる世界だからこそ客観的に相違点を考えることができるというメリットがあるのではないか。普段の実務における文脈を離れて考えることによって、改めて自分の専門領域における課題や特徴というものに気づけるのである。

また、グループワークにおけるグループも多様な専門職によって構成され、自分の具体的な事例を多く共有して頂いた。プロとして働くこと、プロとともに働くことに関して、抽象的な議論で終わるだけではなく、各参加者の実務の場面における具体的な出来事も多く共有して頂くことができた。全く異なる専門領域の人に自分自身の専門領域を理解してもらうには、分かりやすく具体的に言語化していく必要がある。普段の実務においてはあたり前だと感じていることも、他の専門職にとってはあたり前ではないということもあり、語るという行為によって気づくことも少なくないと考えられる。本ワークショップは、多様な専門職が参加し、利害関係がない中で自由に議論をすることができたといえる。同じ職場や業界内の専門職で語る際には、権力勾配や利害関係の発生が生じてしまい、自由に考える機会をつくることが難しいであろう。そのため、普段の文脈を離れ、安心して他の専門職と語れる機会を設けることが、自身の考えを深める機会にもつながると考えられる。参加者からは、参加者同士で飲み会も開催してみたいなどの感想もあがり、他の専門職との語りや情報交換における意義を感じさせるものがあった。

他の専門職と語ることによって、多職種連携や専門職教育に関する共通課題を検討したり、自身の専門領域について考える機会となる意義が考察されたが、まだ課題も挙げられる。主な課題としては、本ワークショップにおける学びが日常の業務の中でどの程度活かされるものなのか未知数であるという点である。普段の文脈を離れて自身の専門領域について考えた後、それを普段の文脈にどれほど適用できるものなのであろうか。忙しい日常、経済性や効率性を追求する組織の力、これまでの慣習などによって、業務の進め方などは今までと変わらないということが起こりやすいであろう。本ワークショップがその後においても意味をもつものとするためには、どのような工夫や改善が必要かは検討する必要がある。InterProfessional における取り組みは、模索段階である。単に異業種の人を集めて話し合えば効果的なものになるというものではない。ワークショップの構成においても、その後においても、どのような取り組みが必要なのかについては検証を重ねていきたい。その際には、専門職が抱える課題やニーズの把握も深めながら、効果的なプログラムを模索していきたい。